

## 冬越しする虫たち

長谷川 裕子

12 月も半ばを過ぎ、天覧山・多峯主山に厳しい冬がやってきました。ヒトであれば、厚着やこたつなどで暖を取ることができますが、生きものたちはどのように過ごしているのでしょうか。今回は、冬越しする虫たちの様子を紹介します。



写真① イラガのまゆ

葉が落ちた枝に鳥の卵のようなものがついていることがあります(写真①)。これはイラガという蛾の繭です。イラガの幼虫は、11 月になると石灰質でできた硬い繭を作り、その中で前蛹という蛹になる少し前の姿で越冬します。繭は、寒い冬を耐え抜く防寒具の役割をしているのです。また、身体が凍って細胞が壊れないように、体内でグリセリンを作ります。グリセリンは不凍液の役割を果たし、氷点下に長期間さらされても身体が凍らずにすむので、春には変態を再開することができます。繭はそれぞれ違う模様をしているので、色々な繭を探してみるのも面白いかもしれません。

写真② オオムラサキの幼虫  
大石章氏撮影

エノキという木の根元のふんわりと重なった落ち葉を優しくひっくり返すと、落ち葉の裏にじっと動かずにいる幼虫がいます。幼虫の背面には、ツノのような突起が4対あり、腹部の先端は2つに割れ、開いています。これはオオムラサキの幼虫です(写真②)。オオムラサキは、昭和32(1957)年に日本昆虫学会で選定された国蝶です(写真③)。幼虫は晩夏に生まれ、脱皮を繰り返して大きくなっていきます。11 月になると、幼虫はある程度大きくなって枯れ葉と同じような色になり、木を降りて落ち葉の下にもぐり込んで冬越しをします。無事に冬越しした幼虫は、エノキの芽がふくらむころに休眠から覚めて、木に登っていきます。幼虫を探すときは、あまり枯れ葉を動かさないようにそっと探しましょう。幼虫に振動が伝わり、体力を消耗して死んでしまうこともあるからです。

写真③ オオムラサキの成虫  
大石章氏撮影

この他にも、田んぼの枯れ草にオオカマキリの卵がついたり、案内板にはミノムシの”蓑”がぶら下がっていたりします。人家の近くでは、ナミテントウというテントウムシが集団越冬する姿も見かけます。このように虫たちは、卵、幼虫、蛹、成虫など様々な姿で、冬の寒さから身を守り、あたたかい春を待っているのです。